**復元製作実施設計**

［復元資料名］　**旧円覚寺 釈迦如来坐像**

| | |
|---|---|
| ［原資料名］　旧円覚寺 釈迦如来坐像 | ［指定］県指定有形文化財（彫刻） |
| ［年代］1670 （寛文 10）年 | ［作者］吉野右京 |
| ［所蔵］沖縄県立博物館・美術館 | ［所蔵番号］ |

［選定理由］

王家の菩提寺である円覚寺に安置されていた日本（江戸時代）の釈迦三尊像の中尊仏像で、沖縄戦により被災した戦災文化財である。琉球の彫刻史を考える上で極めて重要な資料であり、仏教史や交易史を考える上でも重要な資料である。日本製の仏像であるが、その後の琉球仏教彫刻に影響を与えたと考えられることから、製作を通して琉球の造形美の源流の一つを探ることができると考えられるため復元対象とする。

［保存状態］

沖縄戦により破損。本尊は坐像のみ残るが、頭部欠失。光背や蓮華座は一部を残すのみである。2005 年度に公益財団法人美術院にて修復。

［法量］

像　高：33.7 ㎝　像奥行：36.0 ㎝　像　幅：35.0 ㎝

［素材・材質］

ヒノキ材（推定）

| ［技法］※参考文献より引用 | ［付属］ |
|---|---|
| 造り：寄木造（一木割矧造）、<br>割首、玉眼嵌入（詳細は備考）<br>彩色：漆塗りに金箔 | 関連資料：文殊菩薩・普賢菩薩坐像/<br>白象座像・獅子座像<br>（沖縄県立博物館・美術館） |

［想定される科学調査］

・樹種同定　・CT 撮影

・3D 計測　・蛍光 X 線分析（金属部分）

［主たる材料調達先］

木材：国産のヒノキを想定。比較的入手しやすい材であるため、監修委員および製作担当者が使い慣れている国内の材木店等から調達する。

漆：国産または中国産の漆を想定。製作者が使い慣れている漆業者から調達する。

金箔：監修者、製作担当者、事務局で協議の上で号数を決める。その上で、製作者が使い慣れている入手ルートから調達する。

金工：蛍光 X 線分析結果を基に、製作者が使い慣れている入手ルートから調達する。

［年度別工程表］

| 年度 | 製作作業内容 |
|---|---|
| 2024（令和 6）年 | ①科学調査（CT 撮影、樹種同定） |
| | ②3D 計測（釈迦如来坐像＋法然寺） |
| | ③製作デジタル図面作成 |
| 2025（令和 7）年 | ①粘土原型製作 |
| | ②石膏取り |
| | ③試作 |
| | ④木材調達 |
| 2026（令和 8）年 | ①荒彫（如来坐像、台座、光背） |
| | ②連弁サンプル製作 |
| | ③連弁製作 |
| 2027（令和 9）年 | ①仕上彫（如来坐像、台座、光背） |
| 2028（令和 10）年 | ①漆箔（如来坐像、台座、光背） |

［製作仕様］

試作：粘土模型製作後、監修者または製作者の必要に応じ木彫の試作も行なうこと。欠損している髻（もとどり）等の形状は鎌倉芳太郎資料の高精細画像を根拠として製作する。また法然寺（香川県）の資料を類例とし、監修者・製作者・事務局で協議したうえで復元する形状を決めていく。

木材：国産のヒノキを想定。

造り：一木割矧の寄木造を想定。接合、接着には釘、鎹、膠の使用を想定するが、原資料調査で上記以外の材料が確認された場合はそれに類する材料を使用する。

塗り：国産または中国産の漆を想定。

仕上げ：箔押しし、必要箇所には彩色を行うこと。原資料や類例の目視調査や科学分析結果を参考に、監修者・製作者・事務局で協議したうえで決めていく。また、宝冠等の金属部の製作を行なう。

輸送：美術輸送を想定。木の変形を減らすため、急激な温湿度変化が起きないように輸送用の木箱を作り、アートソーブ等を入れて輸送すること。ただし、光背、蓮華座取り付けた状態かは状況を確認しながら決定する。

納品：本製作および試作、余った材料の一部、調査時や製作時の写真等を納品すること。

その他：歴史上の誤謬を避けるために模造復元の製作年、製作者、事業名を記すこと。

［備考］

本来は文殊菩薩、普賢菩薩坐像等を含む三尊像だが、今回は釈迦如来坐像のみを復元する。

［調査］

2022 年 12 月 21 日　熟覧調査（R4 第 2 回ワーキング）

2023 年 3 月 2 日　香川県法然寺　類例調査

2023 年 12 月 20 日　目視による樹種同定調査（東北大学植物園：大山氏）

［類例・参考］

類例：法然寺（香川県）弥勒菩薩坐像。宝冠が附いている。

参考資料：鎌倉芳太郎資料（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵）

参考資料：附属・文殊菩薩・普賢菩薩坐像（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

参考文献：津波古聡「〈資料紹介〉仏像彫刻」（『沖縄県立博物館紀要』第 16 号）、編者により一部編集。

［**資料名**］　旧円覚寺　釈迦如来坐像

| | |
|---|---|
| ［復元資料名］旧円覚寺　観音菩薩立像および十六羅漢立像　《観音菩薩立像》 | |
| ［原資料名］旧円覚寺　観音大師立像および十六羅漢立像 | ［指定］ 県指定有形文化財（彫刻） |
| ［年代］ 17 世紀（下限 1696 年） | ［作者］— |
| ［所蔵］ 沖縄県立博物館・美術館 | ［所蔵番号］ |
| ［選定理由］<br>王家の菩提寺である円覚寺に安置されていた中国（清時代）の仏像で、沖縄戦により被災した戦災文化財である。琉球の彫刻史を考える上で極めて重要な資料であり、仏教史や交易史を考える上でも重要な資料である。中国製の仏像だが、後世の琉球彫刻に影響を与えたと考えられることから、製作を通して琉球の造形美の源流の一つを探ることができると考えられるため復元対象とする。 | |
| ［保存状態］<br>欠損が著しく自立できない。木材の劣化が激しい。 | |
| ［法量］※参考文献より引用<br>像高：38.2 ㎝　像奥行：10.0 ㎝<br>像幅：14.0 ㎝　頭頂～顎：6.1 ㎝　面幅：4.0 ㎝　 面奥：4.6 ㎝ | |
| ［素材・材質］<br>ヤシまたはシュロの単子葉類 | |
| ［技法］※詳細は備考に記載<br>造り：一木造<br>下地：不明<br>彩色：全体に漆塗りに金箔 | ［付属］<br>羅漢立像 9 点 |
| ［想定される科学調査］<br>・樹種同定　・CT 撮影<br>・3D 計測　・蛍光 X 線分析 | |
| ［主たる材料の調達先］<br>木材：ヤシまたはシュロを想定。予算の制限があるため、国内流通分を探すこととする。監修委員または製作担当者から調達ルートをヒアリング。<br>漆：国産または中国産の漆を想定。製作者が使い慣れている漆業者から調達する。<br>金箔：製作者が使い慣れている漆業者から調達する。号数の選定においては監修者・製作者・事務局で協議したうえで決定する。 | |

［年度別工程表］

| 年度 | 製作作業内容 |
| --- | --- |
| 2024（令和 6）年 | ①科学調査（CT 撮影） |
| | ②3D 計測、デジタル図面作成 |
| 2025（令和 7）年 | ①木材調達 |
| | ②粘土原型製作 |
| 2026（令和 8）年 | ①試作 |
| 2027（令和 9）年 | ①荒彫 |
| 2028（令和 10）年 | ①仕上げ彫 |
| | ②漆箔 |

［製作仕様］

試作：粘土模型製作後、監修者または製作者の必要に応じ木彫の試作も行なうこと。欠損部分の形状は鎌倉芳太郎資料の高精細画像と類例を参考とし、監修者・製作者・事務局で協議したうえで決めていく。

木材：ヤシまたはシュロを想定。国内流通分、または県内で入手する方法を探すこととする。

造り：ヤシまたはシュロの１本の材から彫りだすこと。ただし、台座の材や形状については監修者、製作者、事務局の三者で調整する。

塗り：中国産の漆を想定。

仕上げ：漆箔を想定。原資料や類例の目視調査や科学分析結果を参考に、監修者・製作者・事務局で協議したうえで決めていく。

輸送：美術輸送を想定。木の変形を減らすため、急激な温湿度変化が起きないように輸送用の木箱を作り、アートソーブ等を入れて輸送すること。

納品：本製作および試作、余った材料の一部、調査時や製作時の写真等を納品すること。本製作については、中性紙製の紙箱を作成して納品すること。

［備考］

本来は観音菩薩立像と十六羅漢立像の計 17 躰が円覚寺三門上に安置されていたが、本事業では観音菩薩立像・十六羅漢立像の 5 躰のうち 4 躰を復元する。

［調査］

2022 年 12 月 21 日　熟覧調査（R4 第 2 回ワーキング）

2023 年 12 月 20 日　目視による樹種同定調査（東北大学植物園：大山氏）

［類例・参考］

参考資料：鎌倉芳太郎資料（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵）

参考文献：津波古聡「〈資料紹介〉仏像彫刻」（『沖縄県立博物館紀要』第16号）、編者により一部編集。

・歩こうとする姿を表した漆箔の観音像。両手がなく、顔面および宝髻部分と躰の左部分が抉られている。また、背も削られており、所々木肌が露出している。像の底部にはふたつのホゾ穴がある。
・もともと円覚寺山門楼上に十六羅漢像とともに安置されていたが、大正～昭和にはすでに両手はなく、半球らしき台座に乗っていた。
・1696（康熙35）年、十六羅漢像とともに中国より請来したもので、この像を中心に左右に十六羅漢像が配置されていたという。両腕を失ったためこの像の種類は明らかではないが、頭部の宝髻とそれを被う布の形状により三十三観音のひとつとも考えられる。

参考文献：『旧円覚寺美術工芸関係資料報告書』より一部引用。

・頭に衣を被る白衣観音であるが、面部、右肩以下右側面が磨損し、両手両足を失う。『沖縄文化の遺宝』では、既に両手を失った姿が掲載されており、戦災時の損傷は、主に磨損した面部、右肩以下であることがわかる。やや左側に向いた姿勢をとり、胸元にはか裙の結び目を表し、膝以下の衣は風をはらんで左側（当初は左右）に広がっている。
・広葉樹系軽量材の一木造で、両手首以下別材で、袖口に刳られた丸孔に差し込む。
・像底部中央には台座との接合のため丸孔が穿たれている。
・表面の仕上げは赤茶色系の漆を塗布している。
・本像も材質、構造からみて中国製と思われる。
・（『球陽』）「諸寺旧記」の記事から、1696（康熙35）年に中国・福建省から新たに十六羅漢像とともに請来され、山門修復後に安置したとされている。現在の十六羅漢像・観音立像は本記事にみえる請来像に合致し、両像が中国福建省で造られたもので、1696（康熙35）年、琉球に請来した像であることが判明する。

構造・技法について〔上記内容と一部重複有〕

（参考文献：『旧円覚寺美術工芸関係資料報告書』123頁、「観音菩薩立像」）

・一木造
・彫眼
・彩色

・頭頂から地付に至るまで広葉樹系の一材製。
・内刳は施さない。
・両手首以下別材（亡失)。
・手首に丸孔（径 1.2）を穿つ。
・像底部にも丸孔（径 1.4）を穿つ。
・欠損部：(亡失）肩より膝に至る右体側部、両手首以下、両足先
　　　　（磨損）頭頂部前面、面相部、裳折り返し先端

| ［資料名］ 旧円覚寺　観音菩薩立像および十六羅漢立像 《観音菩薩立像》 |
|---|
| 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』より転載、「83 円覚寺　三門楼上観音大士像」<br> |

［復元資料名］旧円覚寺（きゅうえんかくじ）　観音菩薩立像（かんのんぼさつりゅうぞう）および十六羅漢立像（じゅうろくらかんりゅうぞう）《十六羅漢立像（じゅうろくらかんりゅうぞう）-①,②,③,④》

| | |
|---|---|
| ［原資料名］旧円覚寺 観音大師立像および十六羅漢立像 | ［指定］<br>県指定有形文化財（彫刻） |
| ［年代］17 世紀（下限 1696 年） | ［作者］— |
| ［所蔵］沖縄県立博物館・美術館 | ［所蔵番号］ |

［選定理由］

王家の菩提寺である円覚寺に安置されていた中国（清時代）の仏像で、沖縄戦により被災した戦災文化財である。琉球の彫刻史を考える上で極めて重要な資料であり、仏教史や交易史を考える上でも重要な資料である。中国製の仏像だが、後世の琉球彫刻に影響を与えたと考えられることから、製作を通して琉球の造形美の源流の一つを探ることができると考えられるため復元対象とする。

［保存状態］

① 手の部分は亡失している。表面に彩色がわずかに残っている。当初に抱えていたとされる動物の彫刻も亡失している。

② 頭部や邪鬼の彫刻は亡失。彩色は剥落している。長期に渡る損傷により表面の形状が変形している。

③ 彩色がわずかに残っている。台は修理の際に作られたもの。

④ 手足は欠失しているが、修理が施されたことにより状態は安定している。台は修理の際に作られたもの。ごくわずかに彩色が残っている。

［法量］※参考文献より引用

① 総　高：44.2 ㎝　像 高：34.6 ㎝
像奥行：10.0 ㎝　像幅：14.0 ㎝　頭頂～顎：7.0 ㎝　面　幅：15.0 ㎝
面奥：8.5 ㎝　台座：高 10.0 ㎝×奥行 18.0×幅 25.1 ㎝

② 総高：39.8 ㎝　像高：29.4 ㎝　像奥行：9.0 ㎝　像　幅：14.2 ㎝
台座：高 9.6 ㎝×奥行 10.1 ㎝×幅 25.2 ㎝

③ 像　高：35.8 ㎝　像奥行：10.4 ㎝
像　幅：13.0 ㎝　頭頂～顎：6.7 ㎝　面幅：4.5 ㎝　面奥：5.3 ㎝

④ 像高：34.8 ㎝　像奥行：10.0 ㎝　像幅：17.2 ㎝　頭頂～顎：6.8 ㎝
面　幅：4.1 ㎝　面　奥：5.6 ㎝

［素材・材質］

クスノキまたはタブ（推定）

| | |
|---|---|
| ［技法］※詳細は備考に記載<br>造り：一木造<br>下地：不明 | ［付属］<br>観音菩薩立像 1 点<br>羅漢立像 8 点 |

彩色：[肉身]朱
[マント]朱、緑青
[マントおよび衣の裏]朱、青緑
[沓]青緑・朱

**[想定される科学調査]**

・樹種同定　・CT 撮影
・3D 計測　・蛍光 X 線分析

**[主たる材料の調達先]**

木材：中国産クスノキまたはタブを想定。予算の制限があるため、国内流通分を探すこととし、入手困難と判断される場合は代替として国産クスノキまたはタブを使用する。監修委員または製作担当者から調達ルートをヒアリング。
彩色：監修委員および製作担当者が使い慣れている国内の画材店等から調達する。

**[年度別工程表]**

| 年度 | 製作作業内容 |
|---|---|
| 2024（令和 6）年 | ①科学調査（CT 撮影） |
| | ②製作図作成 |
| 2025（令和 7）年 | ①木材調達（クスノキまたはタブを想定） |
| | ②粘土原型製作 |
| 2026（令和 8）年 | ①試作 |
| 2027（令和 9）年 | ①荒彫 |
| 2028（令和 10）年 | ①仕上げ彫 |
| | ②彩色 |

**[製作仕様]**

試作：粘土模型製作後、監修者または製作者の必要に応じ木彫の試作も行なうこと。欠損部分の形状は鎌倉芳太郎資料の高精細画像と類例を参考とし、監修者・製作者・事務局で協議したうえで決めていく。
木材：中国産クスノキまたはタブを想定。予算の制限があるため、国内流通分を探すこととし、入手困難と判断される場合は代替として国産クスノキまたはタブを使用すること。
造り：一木造で製作すること。十六羅漢立像-①と十六羅漢立像-②は同一の一木から木取りする。
仕上げ：胡粉彩色を想定。原資料や類例の目視調査や科学分析結果を参考に、監修者・製作者・事務局で協議したうえで決めていく。
輸送：美術輸送を想定。木の変形を減らすため、急激な温湿度変化が起きないように輸

送用の木箱を作り、アートソーブ等を入れて輸送すること。
納品：本製作および試作、余った材料の一部、調査時や製作時の写真等を納品すること。
本製作については、中性紙製の紙箱を作成して納品すること。

［備考］
・本来は観音菩薩立像と十六羅漢立像の計 17 躰が円覚寺三門上に安置されていたが、本事業では観音菩薩立像・十六羅漢立像 5 躰のうち 4 躰を復元する。
・「十六羅漢立像-③」はもともと「仮名称 十六羅漢立像-⑥」としていたが、監修者会議で協議の結果、この名称に変更した（2023.12）。
・「十六羅漢立像-④」はもともと「仮名称 十六羅漢立像-⑤」としていたが、この名称に変更した。

［調査］
2022 年 12 月 21 日　熟覧調査（R4 第 2 回ワーキング）
2023 年 12 月 20 日　目視による樹種同定調査（東北大学植物園：大山氏）

［類例・参考］
参考資料：鎌倉芳太郎資料（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵）

十六羅漢立像-①
参考文献：津波古聡「〈資料紹介〉仏像彫刻」（『沖縄県立博物館紀要』第 16 号）、編者により一部編集。
円覚寺山門楼上に安置されていた立像。台座を含み、一材よりの丸彫りで内刳りなし。顔料はわずかに残されているが、両腕はない。躰は正面を向いているが、顔は左を向いている。
<u>破損前のこの像は小動物の後ろ足を両手でつかんでおり、小動物は前足を羅漢の胸と肩に置く。同位置に残る突起物は、この小動物の前足と思われる。</u>
→鎌倉画像「86」と同一と推測される。

構造・技法について
（参考文献：『旧円覚寺美術工芸関係資料報告書』、「羅漢立像（その七）」）
・一木造
・彫眼
・彩色
・頭頂から台座に至るまで堅木一木からなる。
・内刳は施さない。

・木芯は前方中央に外す。
・剃髪部 薄墨、
・外套外縁部 緑青、
・内部 朱、
・裳は白地に朱、
〔＊津波古論文より[肉身]朱、[マント]朱・青緑、[マントおよび衣の裏]朱、
[沓]青緑・朱〕
・欠損部：両肘以下、右肩の小動物

十六羅漢立像-②
参考文献：津波古聡「〈資料紹介〉仏像彫刻」(『沖縄県立博物館紀要』第16号)、
編者により一部編集。
円覚寺山門楼上に安置されていた立像。損傷がひどく、首および両手などを失う。顔料も窪みに埋まるように残されているが、マント部の格子模様が薄く残る。
もとの像容は少しうつむき、左手を小形の天部像の肩にのせている。この小形の天部像の足が台座上にわずかに残されている。なお、この像とともに首のみの残欠が置かれてあったが、別のものと思われる。首は眼・鼻・口等の彫りを失い、顔料も胡粉がわずかに見える程度。頭頂から顎までの長さは7.2㎝で、首柄は12㎝あり、長く造られている。
→鎌倉画像「85」と同一。

構造・技法について
（参考文献：『旧円覚寺美術工芸関係資料報告書』、「羅漢立像（その四)」)
・木造
・彩色
・台座まで含んだ一材製。
・内刳りは施さない。
・木芯は後方中央に外す。
・衣には僅かに白地、緑青、朱等が残り、緑・条葉の痕跡も残る。
〔＊津波古論文より彩色：[マントおよび衣]朱・青緑・胡粉〕
・磨損、破損がはなはだしい。
・欠損部：頭部、両手肘以下、躰部前面のほとんど、右足甲半ば以下、台座の一部

十六羅漢立像-③
参考文献：津波古聡「〈資料紹介〉仏像彫刻」(『沖縄県立博物館紀要』第16号)、

編者により一部編集。

台座および後頭部がなく、口髭をもつ羅漢像。両手を袖の中に入れ左胸の前で拱手する。部分的ではあるが、胡粉と青緑が多く残されている。

もとの像容は岩座に立ち、足に沓をはき、八の字に開いて立つ。『沖縄文化の遺宝』より、彩色は襟の部分を残して朱となし、裾の部分は青緑一色のように見える。かつては山門楼上の向かって左に配置されていた。

→鎌倉画像「82　円覚寺　三門楼上向かって左部分」の⑥（左から6番目）の像か？

→鎌倉画像「84　円覚寺　三門楼上羅漢像」と近似

構造・技法について

（参考文献：『旧円覚寺美術工芸関係資料報告書』、「羅漢立像（その五）」）

・木造
・彫眼
・彩色
・頭躰一材製。
・内刳は施さない。
・木芯は前方中央に外す。
・内衣は白地、外衣は白地に朱。
・裳は緑青。

〔＊津波古論文より[肉身]胡粉、[裳]青、[裳の襟]朱、[台座]青緑・朱・胡粉〕

・欠損部：両足甲以下、後頭部、裳裾両端、台座

十六羅漢立像-④

参考文献：津波古聡「〈資料紹介〉仏像彫刻」（『沖縄県立博物館紀要』第16号）、
編者により一部編集。

右手を左側外套の襟の中へ入れ、顔を突き出すように。右に向いている像で山門楼上の向かって左側に配置されていた。現在は右手首・左側外套の一部と足および台座を失っている。躰前面に彩色された部分はなく、外套の背面に朱と青緑色が確認できる。この青緑色の一部分（断片であるが）にさらに胡粉を塗り、墨による波型の線描がわずかに残されている。

戦前の像容は顔を右側に突き出すように向けており、彩色も衣文にそって大胆に施されていたようである。

構造・技法について

（参考文献：『旧円覚寺美術工芸関係資料報告書』、「羅漢立像（その六）」）

・木造
・彫眼
・彩色
・頭躰一材製。
・内刳は施さない。
・木芯は右斜前方に外す。
・衣、裳は白地。
〔＊津波古論文より[外套]朱・青緑〕
・欠損部：躰部左肩以下、手を含む体側面、左足大腿部以下、右足甲以下、右手前膊〈うで〉半ば以下、台座

［**資料名**］旧円覚寺　観音菩薩立像および十六羅漢立像　《十六羅漢立像-①》

［**資料名**］旧円覚寺　観音菩薩立像および十六羅漢立像　《十六羅漢立像-②》

［**資料名**］旧円覚寺　観音菩薩立像および十六羅漢立像　《十六羅漢立像-③》

［**資料名**］旧円覚寺　観音菩薩立像および十六羅漢立像　《十六羅漢立像-④》

［復元資料名］旧円覚寺　龍淵殿板戸透彫羽目板（龍・鳳凰）

| | |
|---|---|
| ［原資料名］旧円覚寺龍淵殿板戸 | ［指定］ 県指定有形文化財（彫刻） |
| ［年代］1721 年頃 | ［作者］ — |
| ［所蔵］沖縄県立博物館・美術館 | ［所蔵番号］ |

［選定理由］

王家の菩提寺である円覚寺の建造物の一部分で、『琉球国由来記』に 16～17 世紀にかけて円覚寺の諸堂を修理した記録が散見されることから同時期に製作されたと思われる。琉球で製作されたことがあきらかな彫刻であることから、琉球彫刻史を考える上で重要な資料であり、琉球の造形美を探る上でも重要と考えられるため復元対象とする。

［保存状態］

沖縄戦により被災。板戸の板は一部欠失。取り扱い要注意。塗膜の剥落もみられる。

［法量］※一部参考資料より引用

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 龍 | ［戸　板］ | 高さ：158.0 ㎝ | 幅：56.5 ㎝ | 奥行：4.5 ㎝ |
| | ［透彫部］ | 縦：27.4 ㎝ | 横：44.8 ㎝ | |
| 鳳凰 | ［戸　板］ | 高さ：158.0 ㎝ | 幅：56.5 ㎝ | 奥行：4.5 ㎝ |
| | ［透彫部］ | 縦：24.2 ㎝ | 横：37.6 ㎝ | |

［素材・材質］

透彫部分：ヒノキ（推定）　木枠：スギ（推定）

| | |
|---|---|
| ［技法］<br>下地：不明<br>彩色：[雲・鳳凰]白・赤・青・緑<br>　　　[龍]金 | ［付属］<br>なし |

［想定される科学調査］

・樹種同定　・CT 撮影

・3D 計測　・XRD

［主たる材料の調達先］

木材：監修委員および製作担当者が使い慣れている国内の材木店等から調達する。国産のヒノキを想定（比較的入手しやすい材であるため）。

［年度別工程表］

| 年度 | 製作作業内容 |
| --- | --- |
| 2024（令和 6）年 | ①科学調査（蛍光 X 線分析、樹種同定）<br>②製作図作成 |
| 2025（令和 7）年 | ①木材調達<br>②試作 |
| 2026（令和 8）年 | ①荒彫 |
| 2027（令和 9）年 | ①仕上彫 |
| 2028（令和 10）年 | ①彩色<br>②保存箱作成 |

［製作仕様］

試作：欠損部分の形状は監修者・製作者・事務局で協議したうえで決めていく。

木材：国産のヒノキを想定。

造り：彫刻部分のみを製作すること。一枚板で作成すること。

仕上げ：胡粉彩色を想定。明らかに後補の塗り直しである塗膜は復元根拠にしない。原資料や類例の目視調査や科学分析結果を参考に、監修者・製作者・事務局で協議したうえで決めていく。

納品：本製作および試作、余った材料の一部、調査時や製作時の写真等を納品すること。本製作については、中性紙製の紙箱を作成して納品すること。

［備考］

本来は戸板の形状であるが、今回の復元の目的は木彫刻の復元であるため彫刻部分以外の復元は行わない。

［調査］

・2022 年 12 月 21 日　熟覧調査（R4 第 2 回ワーキング）

・2023 年 12 月 20 日　目視による樹種同定調査（東北大学植物園：大山氏）

［類例・参考］

参考文献：『沖縄美術全集　5』、西村貞雄「琉球の彫刻」より一部引用・抜粋。

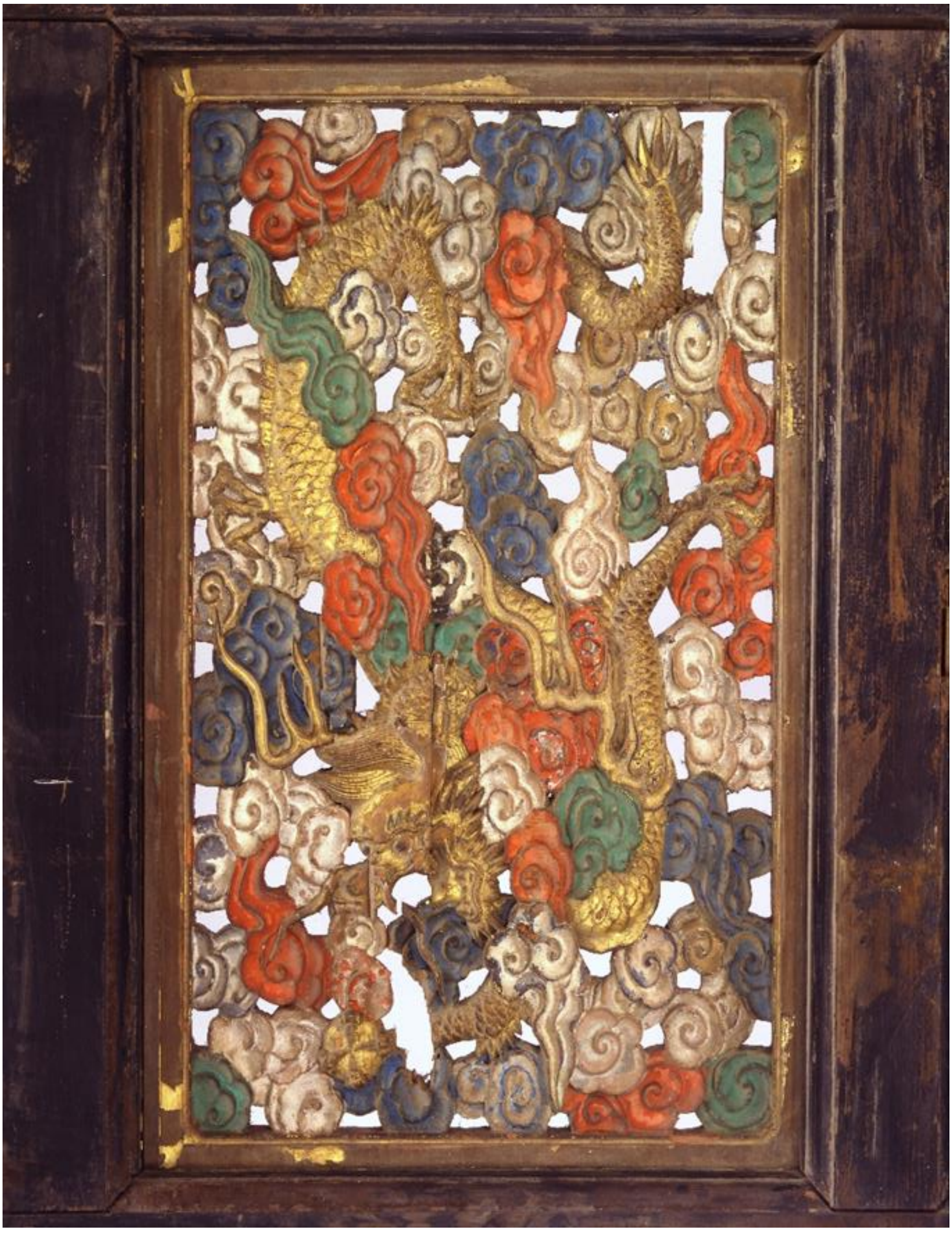
・円覚寺には丸彫の他に、建築の装飾として浮彫が施されていた。

・円覚寺龍淵殿板戸透彫は 2 枚の板戸の一方に龍と雲紋、もう一方に鳳凰と雲紋を組み合わせた透彫である。

・透彫には欄間彫刻によく見られる表裏両面に図柄を透かす方法と、片面の地に透彫を施す方法とがあるが、この板戸の場合は表の地に図柄を透かしている。
・日本的な図柄で細かい彫りではあるが、あまり抑揚はつけていない。
・緑青、群青、金等の極彩色で豪華な印象を与える。

［**資料名**］旧円覚寺　龍淵殿板戸透彫羽目板（龍）

龍部分



［**資料名**］旧円覚寺　龍淵殿板戸透彫羽目板（鳳凰）

鳳凰部分